「日本語教授法」の目的と方法

――アンケート調査による実態の分析――

馬場良二

1、はじめに

一九八八年度から熊本女子大学には日本語教育課程が設置され、一九八九年度より「日本語教授法Ⅰ」の講義が始まった。筆者はこの講義を担当している。初対面の学生についておおまかなことだけでも知っておきたいと思い、第一回目の講義のときにアンケートを実施した。その内容は以下の通りである。

1　「日本語教授法Ⅰ」をとる理由

2　この講義で勉強したいこと、期待していること。その理由。

A、ガ行鼻濁音とは何か。

B、日本語の格助詞の「と」にはいろいろな用法がある。

①動作の相手を表わす。

友と学ぶ。

②思考・判断の内容をそれと指示する意を表わす。

～と言う／思う。

③～のように　花と散る。

それでは、「を」にはどんな用法があるでしょう。例文をつけて書いてください。

C、①雨がふっている。②雨がやんでいる。③あかりがついている。④あかりをつけている。⑤高い山がそびえている。①～⑤の文の動詞を意味的に分類し、その分類と、～ているの関係を書いてください。

D、「仲間」という語の意味は何か。例文をつけて書いて下さい。

ここでは、アンケートの回答のうち受講理由と講義に対する要望を中心に取り上げ、同時に、この講義の目指すところをあきらかにしていきたい。

2　アンケートに対する学生の反応

質問の1、2は学生の「気持ち」を、AからDは「知識」あるいは「分析能力」を知るためのものである。Aは音声、Bは格助詞、Cは動詞の活用、Dは語の意味に関す

るものである。

「まるで文法の試験だ」と言いながら、学生たちは努力して書いてくれた。確かに、アンケートと言うには専門的すぎる質問があったと思う。しかしながら、さすがに日本語話者だけあって、わからないとは言いながらも、鋭い直感力と何がしかの知識とによって回答してくれた。体系的記述や専門用語の使用という点では不充分であるが、各人各様に自分のことばで書いている。このうちのDに対する回答は「仲間」の語義分析の重要な資料とした。具体的な回答例と合わせて熊本女子大学『生活文化研究』（第八巻第一号　一九八九年）に発表予定である。

3　「日本語教授法Ⅰ」の受講理由

アンケートの中の受講理由に関する回答をおおまかに集計してみた。

選択式ではなく、各自に自由に書いてもらったので、分類しづらい回答もあった。そのため、この集計には不備な点もあるだろうが、受講生全体のだいたいの傾向は示していると思う。

二年生と三・四年生に分けてあるのは、二年生は卒業までに「日本語教育課程」を修了することができ、一方、三・四年生はこの講義をとっても「課程」は修了することができないからである。二年生の受講生が多く、三・四年生が少ないのもこのためであろう。なお、今のところ、この講義は卒業単位にはならない。したがって、卒業単位取得のためだけに受講している学生はいない。

	2年生	3・4年生	合計
1　日本語の教師になりたい　日本語教員能力検定試験注に合格したい。	19	13	32
2、日本語を外国人に教えてみたい。この講義が自分の将来に役立つかもしれない	9	1	10
3、日本語自体について知りたい。	6	7	13
4、国語科教員をめざしているから。	1	3	4
5、おもしろそうだから。好奇心から。自分自身模索状態。	2	4	6
	37	28	65

注：日本語教員能力検定試験というのは、昭和六十二年度より文部省によって実施されている試験である。資格試験ではないので、この試験に合格しなくとも日本語の教師になることはできるが、教師募集の条件に「日本語教員能力検定試験合格」があげられることが多くなってきている。

かなり明確に、「教師になりたい」という学生が多い。残念ながら、今のところ、国語、英語、家庭科といった学校

教育の教科目となっている分野とは異なり、課程を修了したから、あるいは、試験に合格したからといって教師になれるとは限らない。日本語の教師の場合、教員への道は制度化されていない。現在、整備しつつあるところだが、ここしばらくは「こうすれば日本語教師になれる」という道はできないであろう。

逆に言うと、日本語教師になるのは自分次第ということになる。条件に関して高きを望まなければ働く場所はあるし、現に、日本語の教師は全国的に不足している。また、日本語についてまったく学んだことのない人が、日本人だということだけで日本語を教えている例は世界中に見られる。もっとも、学んだことがあってもいい教師であるとは限らないし、学んだことはなくてもすばらしい教師であることもある。

「教師になりたい」という明確な意志をもって受講する学生が多いのはうれしいことであり、また、教師として責任を感じることでもある。学生の期待に応えるよう努力していきたい。

上記表の分類の2、では、二年生が九名に対して、三・四年生は一名とずっと少ない。これは、二年生が「教師になるかどうかはこれから考えるとして、修了のための単位取得だけは始めておこう」と考えるのに対し、三・四年生は「教師になろうと決めているならともかく、なるかどうかわからないのに、修了できない課程はとらない」と考えているからではないだろうか。

3―1　以下に、回答の中のいくつかを具体的に見ていきたい。

まず、はっきり「日本語の教師になりたい」という例。

回答1　私は高校生の頃から、日本語教員になりたいと思っていました。「なりたい」というよりは、「どんなものかよくわからないけど、一つやってみようかな」という程度ですが。

それで、外国（今のところ韓国）に実際に行って、日本語を教えたいと思っています。教えるためには、現地の言葉を勉強しておいた方がいいんでしょうけど、「行けばなんとかなる」という安易な考えで、結局何もしていません。ですが、私はそういう希望を持っていても、家族（特に母）のことを考えると、「外国に行きたい」とはなかなか言えません。私がいないとさみしがるからです。女子大にきたため、福岡と熊本に離れて暮らしているだけでさみしがっているのになおさらです。だからまだ、私が日本語教師になりたいということは言っていません。でも、外国に行かないまでも、自分の希望にできるだけ沿うようにがんばりたいと思います。

「どんなものかわからないけれど、一つやってみようかな」と書いている一方で、本気で悩んでいる様子がうかがえる。熊本女子大学日本語教育課程修了生の日本語教師第一号になることであろう。

3―2　回答2　日本語教員能力検定試験を受験したい為。という回答もあった。

この学生は三年生のため四年間で卒業しようと思う限りは課程修了はできない。そのため、検定試験のためと割り切っているのであろう。講義の中では「受験勉強」はしないつもりでいるが、講義外で手助けをしてゆきたいと考えている。

3―3　自分の体験、経験をひろげてみたいという例では、

回答3　女子大の国文の先輩が韓国のＹＭＣＡで日本語を教えていらっしゃる事から、海外・国内でのそのような日本語教授について興味があり、できることならば、そういう体験をしてみたいと思う。

私たちの体験できないような体験談・国際化の実状をいろいろと教えてほしい。

夏休み前までの三ヶ月間の講義では、文法、アクセント、ローマ字といった日本語自体のことを取り上げたが、いい教師になるために不可欠の幅広い興味と柔軟な思考を養うよう、夏休み以降は具体的な体験談も織り混ぜようと思う。

3―4　将来何をしようか決まっていないという回答もいくつかあった。

回答4　将来何になりたいのかはまだ漠然としていて、まだ自分が何に一番合っているのかわかってません。だから色々な授業を受けてみようと思っているからです。あと一つはこの大学に入ってそういう授業があり、まだ他の大学ではあっていない授業であるということだからです。

回答5　将来、何が自分のためになるかわからないし、今、何をしていいのかもわからない。だから、まだ決められないでいるので、今やれることはやっておきたい。

日本語教授法Ⅰも、それをうけることによって、自分が何かを決定するときに役だつかもしれない。

そんな中で、次のような学生もいる。

回答6　何に興味がわくか分らないのでとりあえず、授業にでてみようと思った。

回答7　何となくおもしろそうだったから。

「日本語教育」とは何かわからないが、わからないなりに、社会的に注目を浴びている「日本語教育」に興味を持った学生は多いようである。

回答8　勉強したいこと、期待したいことと言っても、日本語教授法という講義がまだはっきりと理解し得ていないので、はっきりとした考えはないです。一応は、日本語とはどういうものなのか、また、日本語を教えることがどういうことなのかを勉強したいですし、日本語が世界でどのように理解されているかを知りたいです。

回答9　これから日本も国際色豊かになり、国際化が進んでいくと思う。そうなると「日本語」を使用する機会がどんどん増えていくと思うし、「日本語」の必要性がより増すと思う。将来、自分がどういう職業につくという事も、全く決めていないので、ひょっとして、参考になると思ってとりました。

いずれにしろ、旺盛な好奇心を裏切らないよう、そして、学生たちが自分の将来を考える際の役に立つよう、いい授

業をしていきたい。

3―5　自分の日本語をよくしたい、日本語について知りたいという回答の例としては、

回答10　自分が言葉をうまく話せない。どもったり、つっかかったり、早口になったりするので、ちょっとでも明りょうな日本語にしたい。

回答11　日本語をほりさげて学ぶことにより、自分自身のコンプレックス（文章を書くのが苦手なことや、要領良く、自分の考えをまとめて、文章化するのが苦手なことなど……）を、なくしたいと思う。

回答12　日本語教員になるつもりはありませんが、単に、日本語に興味があって、詳しく勉強してみたいと思ったので。最近熊本弁と共通語の違いをやたらと意識するようになったので、日本語のイントネーションについて詳しく知りたいと思います。

などがある。

アンケート用紙を配る前に、「日本語教授法Ⅰ」の目的を述べた。ふたつあって、ひとつは「日本語の教え方を学ぶ」、もうひとつは「母語である日本語を客観的に見る訓練をする」。この説明をふまえた回答が以下のふたつである。

回答13　〝あやまった日本語〟を平気で使う私たちが、本当に国語を教えることができるのか大変不安です。外国人からの目では日本語はどう聞こえるのかぜひ知りたいです。

回答14　日本語を客観的にとらえるという視点は、まだ具体的にわからないが、外国人から見た日本語がどのようなものであるかについては大変興味がある。余談になるが、この春休み、某中華料理店のバイト先で、偶然にも中国からの留学生と知り合い、彼女たちから、時々日本語の使い方についての質問をうけた。それはまず我々日本人が考えもしない類のものが多く、改めて日本語というものについて深く考えさせられた。そのことも強く影響をうけているので、客観的な日本語の授業を期待している次第である。

言語を客観的に見た場合、回答13にある〝あやまった日本語〟とはいったい何なのか。「日本語は乱れている」ということばをよく聞くが、どういう意味で使っているのか。文法書や辞書の記述と異なるということなのか、若い世代しかあるいは一部の人しか使っていないということなのか。あるいは、「標準語」と言われているものと違うということなのか。そんなことも、もう一度考え直していきたい。

3―6　国文科の学生の中には、国語学を勉強するため、と回答した学生がいた。扱う対象はどちらも日本語である。「日本語教授法Ⅰ」は国語学の勉強におおいに役立つことであろう。

回答15　母が東京出身のため、幼い頃から自分達の話す言葉と母の言葉の微妙な違いが気になっていた。それで大学には国語学を勉強するつもりできたので、その勉強の一つとして。

先生が黒板に書かれた「日本語話者が日本語を客観的に見る」ということです。理由は、これから先、自分が国語学の何を勉強していこうか、ということをはっきり決めるのに役立つかもしれないからです。

3－7　国文科の学生の中には「国語科教員を目指しているから」という学生がいた。国語学、国文学とは、また、少し違った視点から日本語をみつめなおし、それを通してより豊かな内容を持った指導のできる教師になってもらいたい。英語科教員になろうという学生も同様であり、母語を客観的に見直すことは英語を教えるにあたってはおおいに役立つことであろう。

回答16　今のところ国語教員希望であるが、これからどうかわっていくかわからないので受講しておけば何かの役にたつと思ったので。また日頃つかいなれているはずの日本語をより理解できるのではないかと思ったから。

3－8　国文科の学生には「国文科にいるのだからもっと日本語を勉強したい」と、そして、英文科の学生には「英文科にいて専門は英語だが、自分は日本人なのだから日本語を勉強したい」と考える学生が何人かいた。はつらつとした好奇心と、旺盛な勉学意欲を感じる。

海外で暮らすことになるかもしれないという回答には、

回答17　もし、外国で暮らすとしたら、一番最初にできそうな仕事は日本語を教えることだと思うので、その時に役立つのではないか、と思った。

回答18　日本語教授法は以前から興味があったし、もしかするとこの道に進もうなんて気になるかもしれない。それにうまくいけば外国に高飛びできるかも……。

などがあった。

海外へ飛び出すための手段として、あるいは、海外で暮らすことになった場合の職業として、日本語教育は非常に有用である。ただし、もしそうするなら、有能な教師になれるよう今から惜しまず努力してください。

4　時間割りについて

近年、熊本女子大学に限らず、日本国内の大学の時間割りは込んできている。授業科目の種類から言うと、日本語教授法など新しい科目が加わってきていること、時間割りの枠組みから言うと、できるだけ土曜日の科目は減らし、月曜日から金曜日までに入れようとしていること、などが、理由にあげられる。このため、同じ時限に多くの講義が開かれることになる。また、教員免許の取得制度がかわり、必修科目が増えることは学生の講義履修をより窮屈なものにすることであろう。

そこで、できるだけ多くの学生が受講できるように「日本語教授法Ⅰ」は五時間目になっている。

ところが、

回答19　とにかく退屈な講義にはしないでほしい。五コマ目ともなると、ほとんどつかれきっているので、なかなか頭に入らない。

ということになる。

実際、体育の授業のあとの夏の五時間目ともなると、集中して聞いていなさいという方が無理な話しである。学生に過大な負担をかけることなく、実のある講義にするのはどうすればよいか、頭を悩ませている。

そうやって五時間目に授業をしても、学科の必修単位と日本語教育課程の必修単位との重複の少ない、あるいは、ほとんどない英文科の学生、および、生活科学部の学生が四年間でこの課程を修了するのはむずかしい。

回答20　授業中も話が出ましたが、女子大で開講されている日本語教育のカリキュラムは英文科学生にとって必修単位を全て履修するのが不可能なのでそういった問題点も見直してほしいと思います。

たしかにむずかしい。むずかしくはあるが決して「不可能」ではない。

5　教育実習について

熊本女子大学の日本語教育課程のカリキュラムでは、教育実習の実施を考えている。

回答21　日本語教授法をただ理論だけで終わらすのではなく、実際に実習のようなこともしてみたい。(理由) 教職に教育実習があるのだから、日本語教授法にも実習があってもよいと思うから。

教育実習は一九九一年度より開始の予定であるが、日本語教育の実習はまだあまりに歴史が浅く、決まった型や方式もほとんどない。それに、対象が外国人なので実習の場を確保することにも困難が予想される。教育実習についてはこれから具体化していく段階である。

6　「日本語を客観的に見る」ということ

「日本語教授法Ⅰ」では、どのように教えるかを示すだけでなく、教える対象である日本語を客観的に見る力を養うことも目指している。講義の名称にもかかわらず、実際には、前者より後者の方が中心になっている。なぜ、教え方より、日本語を客観的に見る力なのかというと、ある言語の生まれながらの話者というのは、その言語を使いはするものの、その言語がどのように使われているか意識してはいないと考えられるからである。

テレビの上にのっている新聞が読みたくて、テレビの近くにいる人に、

a、「テレビにある新聞をとってください」と言ったら、通じるであろうが、文法的におかしいと判断されるかもしれない。言った人間が外国人であれば、

b、「テレビの上にある新聞をとってください」

と言うべきだとなおしたくなるところである。

では、b、「テレビの上にある新聞をとってください」が常に「正しい日本語」なのかと言うと、単純に言いきることはできない。たとえば、子育てを終えた夫婦の間の会話で、夫が妻に茶の間で「テレビの上にある新聞をとってください」と言ったら、多くの場合、妻はおどろき、かつ、

夫の身あるいは頭を案じることであろう。

熊本工業高校の野球部員の中のひとりがある日突然「今日の練習はきつかったですネ」と他の部員に話しかけたら、趣味の悪い冗談か、もしくは、何か深い理由があるととられるのではないだろうか。気心の知れた男子高校生の間で「です、ます」体の会話がなされることはまずないからである。

現在使われている言語を考える上では、正しいか正しくないかの前に、とにかく、どのように使われているか、そして、使われた言語がどのように理解されているかをよく見、聞き、考えることが必要である。

日本語話者が日本語に関して持つ知識、あるいは情報の量というのはまさに膨大なものであり、だからこそ、たったひとことを聞いただけでも、話し手の年令、性別から、人柄、その場の状況や聞き手に対する感情まで多くのことがわかる。外国語を学習する場合には単語や文法、微妙な言い回しや発音などひとつひとつ知識として身につけていかなければならないことが山のようにあるが、母語の場合にはその努力は大幅に軽減される。もちろん、日本語話者であっても日本語に関する知識の量は均一のものではないが、日本語話者であればだれもが持っているはずの共通の知識の量というものはそれだけですでに膨大である。しかし、持っている知識の量は膨大であっても、その知識のひとつひとつが何であるかを客観的に分析する能力というのは、訓練を積まなければ身につかない。この講義では、「教授法」を学ぶことより、「日本語を客観的に見る力」を養っていきたい。なぜなら、日本語話者が日本語を教える場合、まず第一に必要である能力が、自分がすでに持っている知識を「客観的に見る力」だからである。

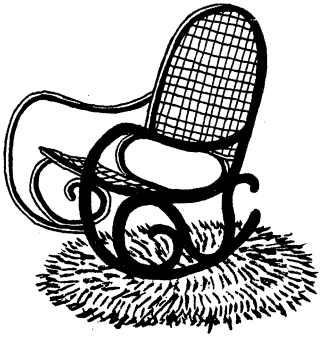
7　おわりに

英文科の学生の回答の中に次のようなものがあった。

回答22　英語を学んで、外国の文化や知識を取り入れることに主眼を置いているけれど、これからの日本には、東南アジアからをはじめ、諸外国から日本で学びたいという人達が多くやってくると思うので、自分が他の国のことを学んでいくことと平行して、自分の国のコトバや文化等を正しく教えられるようになれたら……と思って。外国人から日本へ向けられる疑問によって日本をより客観的に見ることができるのではないかと思って。

外国人がどういう点で間違いやすいか、どういう点を理解しにくいと思っているか……とかいった具体的な例をできるだけ多く取り扱って欲しい。

この学生は「外国の文化や知識を取り入れることに主眼を置いて」きたが、この講義では「外国人から日本へ向けられる疑問によって日本をより客観的に見たい」としている。外国語を学習することが自分の外を見ることによって自分自身を知ることであるとすれば、日本語を学習することは自分の中を見ることによって自分自身を知ることである。その中で自分が成長してきたところの母語をよく見、

聞き、分析する力を養うことは、とりもなおさず、自分自身の考え方、ものの見方を見つめる力を養うことである。

現在、受講生は六十五名ほどであるが、このうち、実際に日本語を非日本語話者に教える人は多くないであろう。しかし、アンケートの回答にもあるように、国語科の教員になる学生はかならず何人かはいるであろうし、それ以上に、「母」となる人は多いはずである。「日本語を客観的に見る力」が、これらの受講生の教師、あるいは、人の親としての「力」となることを強く望んでいる。